



背景

2013 年は、20 年に 1 度行われる伊勢神宮の式年遷宮、60 年に 1 度行われる出雲大社の大遷宮が同じ年に行われる年である。それにより、祭有年として、テレビや新聞などメディアに取り上げられることも多い。天照大神を祀る伊勢神宮、須佐之男命を祀っていた出雲大社、この 2 つの場所は、日本神話が起源であり、深い関わりがある。解釈が異なる神話だが、現代にも通ずる教訓はある。そして、日本神話に対して、注目が集まっているこの時、日本の祖國ともいえる日本神話について考える良い機会である。

プログラム

日本神話を建築を題材として、空間を体験することで、理解を深める。または新たに知ることを提案する。日本神話の魅力を伝え、興味を引くための導入と考える。同時に、人間の側面を感じ、自分が見つめ直すことを目指し、次の神話へと日本神話は伝承される。日本神話のほとんどの「古事記」、「風土記」の内容である。本神話では、古事記についての記述に基づき、古事記では、日本神話は、「上巻」、「中巻」、「下巻」の 3 つの巻で構成されている。その中で、本神話で用いた「上巻」の天照大神と須佐之男命の命についての概説である。

天照大神が宿める高天原に、弟である須佐之男命が来た。天照大神は高天原を暫くに来たと思い、警戒するが、須佐之男命は潔白を証明するために、警戒を行う。その後、須佐之男命は天照大神を裏切り、高天原を裏切った。天照大神は須佐之男命をかばった。それでも、須佐之男命は、再び悪行をし、天照大神は、天宮に引きこもった。そのことで世界は、真っ暗になり、秩序が乱れた。天照大神を天宮から出そうと様々な神が騒ぐと、天照大神は別の様子を思いつき、神たちは天照大神を天宮から出す。そして、世界に光が戻る。

そのため、天照大神は、太陽の神といわれる。

本神話では、この流れの中から、天照大神の視点の出来事、感情を抽出する。抽出した出来事、感情をそれぞれの空間構成の基本要素とする。また、天照大神は、太陽の神であり、光を用いてそれぞれの空間を表現する。古話であるが強い神話であるが、空間化することでストーリーが具体化となり、より身近なものになっていく。そして、社会の所属とは別の神話の世界へと引き込まれる。

コンセプト

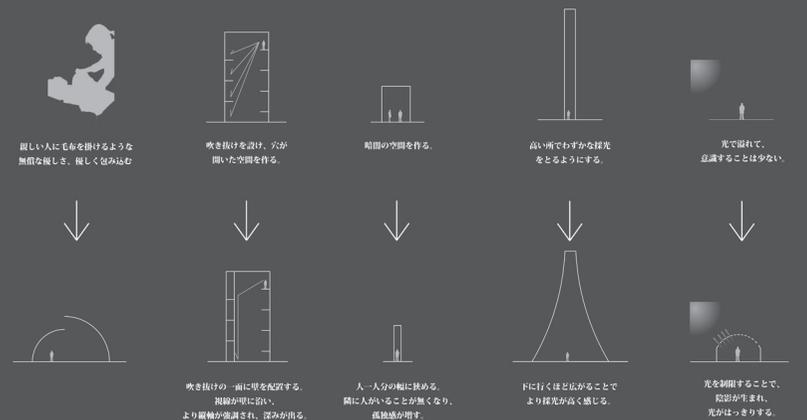
技術の急速な発展に伴い、失われた休息のひととき、そのような時間の空間、森羅とした空間を提案する。時には、スケールの大きな空間を取り入れ、壮大さを感じ、時には、スケールの小さな空間で圧迫される。そのスケールの変化によって、様々な感性を得る。心は浄化され、人々は生まれ変わる。

空間への変換

天照大神の体験を元に、5 つの基本要素を抽出し、その要素を空間に変換する過程を以下の表にまとめる。また、その空間に名前をつける。

	①	②	③	④	⑤
神話での出来事	天照大神が 建速須佐之男命をかばう	天照大神は 建速須佐之男命に 裏切られる	天照大神は 岩屋に引きこもる	天照大神は、 外の様子が気に入り、 岩の間から覗く	天照大神が外に出され、 世界に光が戻る
イメージ	包まれる。暖かさ 柔らかさ	落ちていく	暗い、孤独 狭い	少しの光 遠くから眺める	歓喜、清々しい
空間	包み込む	深い だんだんと暗くなる	わずかな光 一人一人分の幅	高い所から一点の光が 降り注ぐ	太陽が望める 光あふれる
空間の名前	「包」の間	「落」の間	「闇」の間	「望」の間	「陽」の間

空間ダイアグラム



暖かい人にも命を掛けるような無情な純しさ、優しく包み込む

吹き抜けを設け、穴が開いた空間を作る

暗闇の空間を作る

高い所からわずかな採光をとるようにする

光で溢れて、息遣うことは少ない

吹き抜けの一面に暖を配置する。視線が壁に届く。より暖かさが強調され、深みが出る。

一人一人分の幅に狭める。隣に人がいることが無くなり、孤独感が増す。

下に行くほど広がることでより採光が高くなる

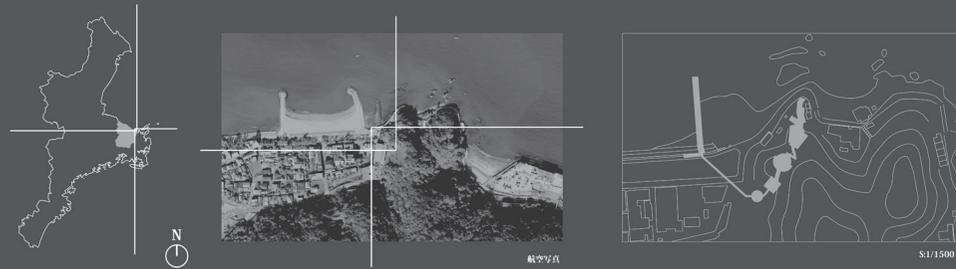
光を制限することで、陰影が生まれ、光がたっぷりする。

計画敷地

三重県伊勢市二見町（二見興玉神社）

アクセス

電車	伊 二見線	15 分
車	伊勢神宮・外宮	20 分
バス	天照宮前	5 分



敷地特性

天照宮は、朝日の出の名所として、元日は多くの人が訪れる。また、伊勢志摩国立公園に属する。二見浦は、国の名勝にも指定されており、天照宮と合わせ、絶景が望める場所として広く知られている。さらに、古来からの賑わいであった伊勢神宮参拝の道に、二見浦で海を渡り、身を清めるための磯の場であったため、現在では、それに代わるものとして、堂草無風草での祓いが行われており、伊勢神宮の式年遷宮の行事の一つとして、浜参宮として定期的に開催されている。

周辺には、国の重要文化財に指定された真田園や、現在では珍しい木造3階建ての歴史ある旅館が数多く残っており、街並み保存に取組んでいる。また、二見シーパラダイスや伊勢・安土磯山文化村、二見浦海水浴場などレジャー施設も多く、全国各地から観光客が訪れ、週末には賑わいをみせる。

二見興玉神社は、菟田彦大神と宇摩御魂大神の大神であり、天照大神の御方として「日の大神」と、神倉700mの海中に沈む、菟田彦大神の遺言と伝えられる「興玉石」を祀っている。また、菟田彦大神は、「道開きの神」といわれおり、神社はあまのついでに、神倉の地に建てられ、数多くのあまのついでに建てられている。

二見興玉神社には、日本神話で、天照大神が隠れた天の岩戸と伝わる場所があり、日本神話と関わりのある敷地である。

天岩戸とは

天岩戸とは、日本神話の中に登場する、岩でできた洞窟のことを指す。天戸、天岩屋、天岩窟がさまざまな呼び方がある。古事記の中では「天の岩戸」、二見興玉神社にあるのは「天の岩屋」と呼ぶ。太陽神である天照大神が隠れ、世界が暗闇になった岩戸隠れの伝説の舞台である。その舞台として関連する場所がいくつかあり、二見興玉神社の「天の岩屋」は、その内の一つである。

敷地写真

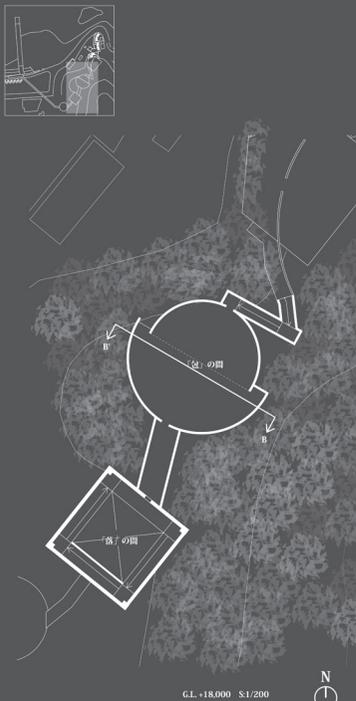
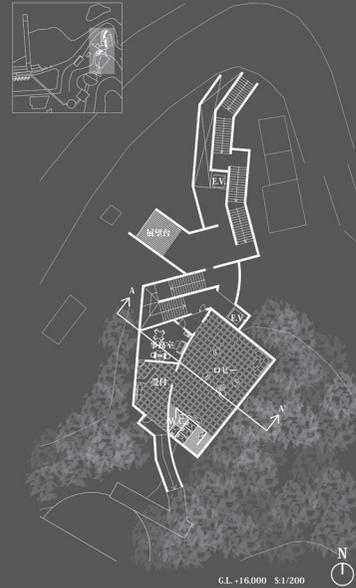


配置計画

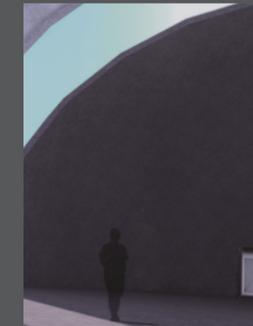
この建物は、一本道のように配置され、再び同じ空間に戻ることは出来ない。進んでいくとともにそれぞれの空間を体験することになる。

二見興玉神社の天の岩屋の横から建物へと向かう。建物までは、約15m程を階段で上がる。これは、神の降臨の表し、別次元の空間への導入である。途中に展望台を設け、二見の海岸を一望できる。

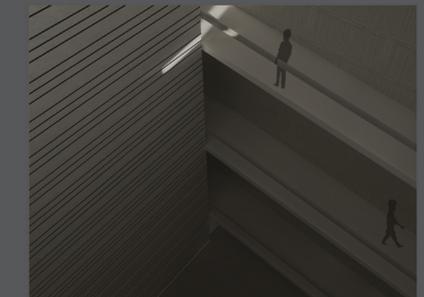
山の頂上、山の中、地上、地下と様々なレベルで、ストーリーが展開される。しかし、外の空間とは、ほとんど隔てられて、入口と出は異なる。最後の空間は、展望台となっており、最初の展望台から見た風景と一致する。しかし、初めとは異なる景色に見える。そして、朝日を眺める事も可能である。



ロビー
これから振り返られる空間の入口。さらに先に進むこと、来た道を引き返すことを決断する時、期待と不安が入り混じる。弧を描いた壁が対峙し、行く先をばはかる。

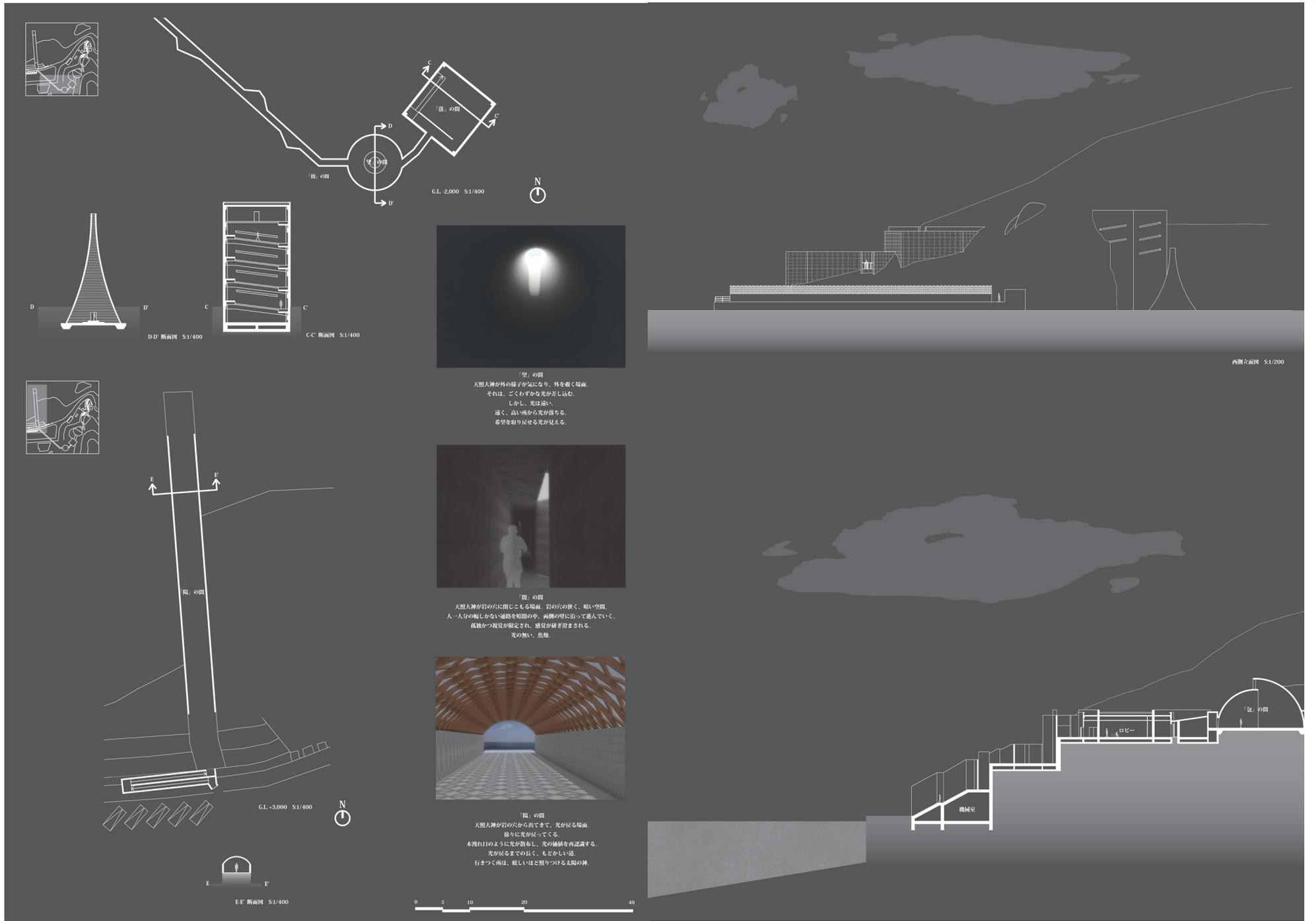


「昼」の間
天照大神が須佐之男命の事をかばう場面。大きな球体（天照大神）が小さい球体（須佐之男命）を包み込む。光が球体の内層を照らし、包み込まれる空間。天照大神の優しさ、温かきを感じる。



「夜」の間
天照大神が須佐之男命に裏切られる場面。天照大神は落胆し、悲しみに包まれる。下に降りるにつれて、深い闇へと落ちていき、閉じはかくなり、光は遠ざかる。下は闇に包まれる。光を失い、大きな絶望を感じる。

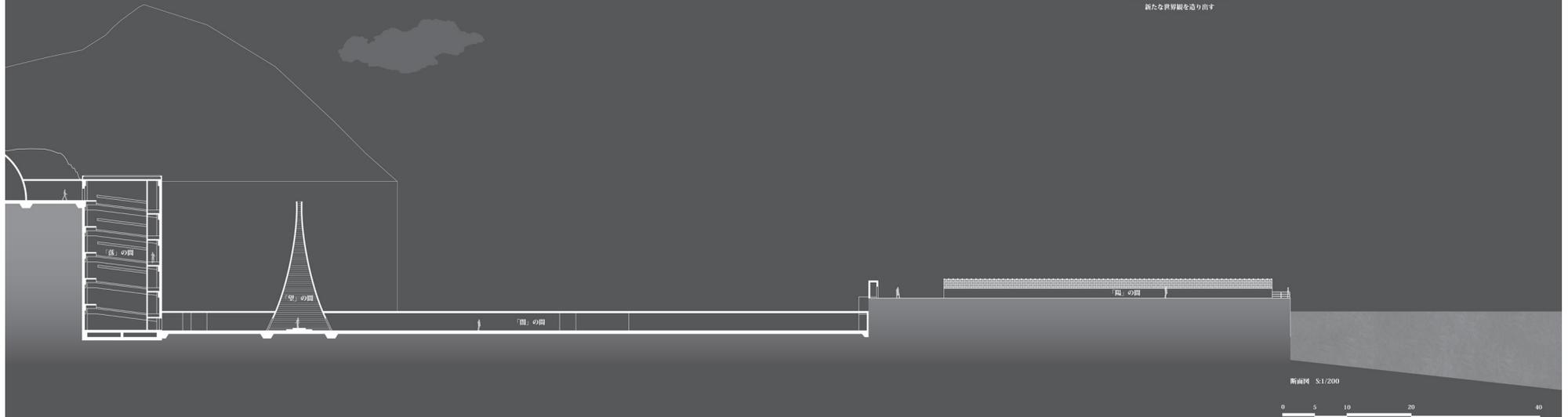






北側立面図 S.1/200

神が造った自然
人間が造った建築物
この対照的な、つぎを往々することで
新たな世界観を造り出す



断面図 S.1/200

